

# 近代名所案内記にみる京都の観光空間

工藤泰子

## はじめに

明治28年(1895)の第四回内国勸業博覧会(以下、「第四回内国博」)および平安遷都千百年記念祭(以下、「記念祭」)の両イベントは、京都の観光(当時は「遊覧」という語が用いられていた)において大きな転換期となった<sup>1</sup>。

第四回内国博の京都誘致と記念祭開催を対象にした研究は多数あるが<sup>2</sup>、本稿は、明治期京都の観光行政を検討する目的から、両イベント時の市編纂名所案内記に着目する。

明治期に発行された名所案内記を用いた研究は多数あるものの、そのほとんどが東京を対象としたものであった<sup>3</sup>。

近世名所案内記の巡覧コースから京都の空間認識の分析を試みたものに、菅井(2004)の研究があるが<sup>4</sup>、近代を対象にした研究は管見ではない。

市政施行(1889)後、初めての大規模なイベントに直面した京都市だが、その際、市では記念祭の一事業として、歴史書としての『平安通志』(1895)を編纂した。『平安通志』は、戦前こそは、記念物として見過ごされて評価が低かったものの、全国の自治体史のさきがけであり、現在では高く評価されている(小林2005)。

また、京都市では、『平安通志』のほか、同年、名所案内記としての『京華要誌』、小冊子『京都記念祭及博覧会一斑』、英文ガイドブック“*The Official Guide-Book to Kyoto and the Allied Prefectures*”の3冊を発行した。

本稿では、明治28年の両イベント時に、京都市参事会から発行された名所案内記の概要と巡覧コースをたどることで、その当時の京都市が発信しようと

していた情報、および、京都の地域区分を読み取ってみたい。

## 1. 第四回内国勸業博覧会と平安遷都千百年記念祭

明治28年(1895)は、第四回内国博および記念祭が開催されたことで、近代京都における観光の大きな転換期となった。第一回から第三回までの内国勸業博覧会は東京で開催されたが、それまでも京都は、第二回(1878)、第三回(1883)勸業博覧会の誘致に向けて動いていた。第二回において、2代目知事に就任していた榎村正直は太政大臣三条実美に京都開催を稟申請したが<sup>5</sup>、内務省へ回送されるにとどまり(丸山1986)、京都の実業界による第二回、第三回の誘致運動も実現に至らなかった。

従って、当時、第四回内国博の京都誘致、および、記念祭の開催は、京都舞鶴鉄道敷設と併せて、京都の「三大事件」あるいは「三大問題<sup>6</sup>」と呼ばれ、京都復興の重要な課題であった。

明治政府にとっては、国家統一のために、公益を私益に優先させる名望家を各地域社会で育成させることが地方自治確立の手段でもあったが(小路田1993)<sup>7</sup>、「三大問題」に対しても、市参事会・市会・商業会議所・実業協会は、市民組織をつくり、問題ごとに結束を固めて活動していた(『京都の歴史8』:66)。このように、当時は、地元の有力者が市行政に非常に深く関与していた。

京都市の場合、一八八八年市制(1889年4月1日施行)における京都市参事会は、合議制執行機関として設置され、市長(1名、府知事と兼任)・助役(2名)・名誉職市参事会員(9名)で構成されていた(秋元2001)。うち、名誉職参事会員は公民(満30歳以上の選挙権を有する者)の中から市会の議決で選出され、単なる名目的な立場ではなく、実態のある執行機関の一員であり、京都市行政の中軸となるような重要な任務を担っていた(同)。

『京都策』を著した児島定七は、その著の中で、東京が経済的および政治的に繁栄していく一方で、「地方疲弊」が益々進行していることを指摘し、「第四

回内国勸業博覧会は是非とも我が京都に開設あらん事を有志者と共に尽力せんとす（児島 1890：15）」と内国博の京都への誘致を訴えた。児島自身、京都財界で活躍する高木文平、濱岡光哲らと第三回内国博誘致に奔走した一人であったため、第四回内国博に関しては早くから強い意欲を示していたのであろう。

さらに、児島は、京都を維持していく方法として「名所保存」「旅客吸収」「工藝美術」の三点を掲げて具体策を提案した。「旅客吸収」は今日の「観光振興」と同意語だが、児島は、鉄道で結ぶ大阪京都を中心とした「関西地方の繁盛の復興」を提案し、「大坂と京都とハ互に商業上の競争を為す如きあり是等□事<sup>ママ</sup>実ハ吾輩の極めて不得策として大に排斥する所なり・・・元来京坂は常に聯合して神戸港を利用せん事を期せざるべからず（下線部引用者による、以下同じ）」と、神戸港利用を合わせた三都市間の連合により、関西全体が繁盛することを期待していた（同：26-28）。

第四回内国博誘致に關しての具体的な動きは、明治 24 年（1891）10 月、堺商業會議所に始まり、京都には翌 25 年 2 月 24 日に伝わった（小林 2006b：123）。同年 5 月以降、大阪、神戸、京都間で内国博開催の誘致合戦が繰り広げられたが（『京都商工會議所史』1944：169-170）、6 月 18 日、関西商業會議所有志會員懇親會にて「関西」地方誘致が決議され、最終的には 26 年 4 月 4 日、勅令第 16 号を以て京都開催が公布された [『平安遷都紀念祭紀事（以下、「紀事」）（下）』1896：25 丁]。

誘致活動には、濱岡光哲、中村栄助ら京都の実業協会業界が尽力した。第四回内国博の開催地として、最終的に京都が選出されたのは、京都が紀念祭の同時開催を掲げたことが決定打だったと言われている<sup>8</sup>。

第四回内国博会期（4 月 1 日—7 月 31 日）中の観覧者は 113 万 6 千人にのぼり、後に「紀念祭の前段階のイベントとして盛況を呈した」とも評されたように（『京都府の百年』1993：114）、極めて大きなイベントであった。

國（2005：153）は、第四回内国博の成績（収益、集客）について、それまでの東京開催と比較して必ずしも成功ではないと指摘しつつも、「京都が近代的な観光都市として発展する基盤を築いた」ことは評価している<sup>9</sup>。

一方、「博覧会ハ政府ノ事務ニシテ農商務省其主任トナリ奠都祭ハ京都市ノ事業」（『紀事（上）』：35丁）というように、第四回内国博と記念祭は、開催主体が異なることをここでは明確にしておきたい。両イベントとも同じ年に開催されたが、内国博はあくまでも国（農務省）の事業、記念祭は京都市の事業であった。記念祭の実施主体は、先の濱岡、中村ほか、京都市会や京都商工会議所を構成する地元の有力者たちであった。

明治25年（1892）初め、自由主義経済評論家の田口卯吉が京都市を訪れた際、京都商業会議所副会頭の中村栄助と会談し、28年は平安遷都千百年目にあたるので、京都市で何か記念事業を行ってはどうかと助言した（中村1938）。これが記念祭開催のヒントとなり、京都実業協会がこのことを市参事会に建議し、参事会および市会で受入れられた（『京都の歴史8』：135 - 136）。

記念祭の準備は、内貴甚三郎をはじめとする京都市参事会員、市会議員からなる遷都記念祭委員によってすすめられた（『平安遷都記念祭紀事（以下、「紀事」）（上）』：1 - 5丁）。さらに、26年、京都府もこの計画に加わり、新たに平安神社（平安神宮）創建の計画がたてられるに至った（『京都の歴史8』：136）<sup>10</sup>。

平安神宮大極殿の地鎮祭（26年9月2日から一週間）においては、式典とその余興に京都市民は熱狂した。また、28年10月22日から24日にかけて開催された記念祭は、勢大に挙行され<sup>11</sup>、その翌日（25日）には、今日の「時代祭」のはじまりである、時代行列が繰り広げられた。

このように、両イベントは明治期京都にとっての大事業であり、明治28年には多数の名所案内記が発行された。『京都出版史』（1991）に記載されているだけでも33冊あるが、笠原（2004）によれば、『京都出版史』に掲載されていないものをあわせると、少なくとも40冊以上は発行されたという。次章以降、明治28年に、京都市参事会から発行された名所案内記をみていく。

## 2. 『京華要誌』 和文案内記 (図1 参照)

『京華要誌』について、『平安遷都紀念祭紀事(上)』に記述されているので参照する。

本誌編纂は、明治26年1月28日の委員会において決定されたものだが(『紀事(上)』:98丁)、当初は「市事業トナスヘキカ請負事業トナスヘキヤノ説アリシカ遂ニ市事業トシ編纂部ニ附(同:99丁)」とあるように、請負とする案もあったが、結局、市事業として紀念祭委員の編纂部に一任され、京都市参事会(内貴甚三郎代表)により出版された(同)。また、「京都市内及ヒ近傍ニ在ル所ノ神社仏閣名所古跡ノ記事ヲ主トシ併セテ連合府県遊覧地ノ概況ヲ載セテ附録トナス」と、単に京都案内に留まらず、連合府県への遊覧客誘致も考慮していた(同:98丁)。



図1 『京華要誌』

「編纂例」には、次のようにある。

案内記ハ旅客ノ便利ヲ計リ編纂スルモノナレハ其体裁文字共平易簡便ヲ主トシ粗漏ニ失セサルヲ要ス

編纂ハ一巻トシ京都市内及ヒ近傍ニ在ル所ノ神社仏閣名所古跡ノ記事ヲ主トシ併

セテ連合府県遊観地ノ概況ヲ載セテ附録トナル其紙数ハ凡ヲ五百頁トシ製本ハ携  
帯ニ便ナルヲ要ス (同：99丁)

下線で記したように、本誌は、旅客の便をはかり、遊覧時に携帯することも視野に入れていたため、一卷約 500 頁と計画されていた。しかしながら、27 年 12 月成稿時には、「其記載の事項多くして成稿に及ひては殆んど二倍以上」(同：100 丁) と、掲載量は膨れ上がっていた。最終的には、三卷(上 285 頁、下 406 頁、附録 254 頁) から成る美しい和装の名勝誌が完成した。比較的軽量ではあるものの、三卷を函に収めると、厚さは 7cm 以上にもなる。遊覧者が携帯したのであれば、一卷ずつ利用していたことであろう。

**表 1** は、『京華要誌』の概要を記したものだが、ここからわかるように、京都の情報だけで、上・下巻(計 691 頁)を占める。上巻の「名勝」[下線 (5)] 部分は 208 頁目から始まり、遊覧箇所の説明は、上巻全体の三分の一以下の掲載量にすぎない。上巻の大部分は、京都全体の説明および記念祭・博覧会関係の情報、そして、「学校」「病院」「重要物産」等の名勝地以外の情報で占められている。

また、皇宮・離宮[下線 (1)]、および、帝国京都博物館、平安神宮、琵琶湖疏水[下線 (2) - (4)] 等近代建築物は、後に登場する「名勝」や遊覧箇所から切り離され、別個の項目が設けられている。

『京華要誌』では、「名勝」の項目として、まず「遊覧曆表」「遊覧箇所略図」を掲載し、「東山」および「加茂川」について説明の後、「中央部」「東南部」「東北部」「西北部」「西南部」「南部」といった地域ごとの遊覧箇所を載せている。遊覧箇所のうち、神社仏閣は官国弊社本山本寺や参拝人の多いところを中心に、由緒ある古社寺が選ばれ、旧跡は「最も著名のもののみ」記されている(『京華要誌(上)』：209)。

表1 『京華要誌』概要

**(上巻)**

総説・京都創立沿革・山城国・現今京都・皇宮御苑・仙洞御所・二條離宮・修学院離宮・桂離宮・附御所離宮拝観手続 (1)・帝國京都博物館 (2)・官衙・紀念祭設計及協賛会・平安神宮 (3)・第四回内国勸業博覧会・時代品展覧会・待賓協会・学校・病院・琵琶湖疏水 (4)・公園・重要物産・各種協会・交通・旅店・名家・著名商店・各興行場名勝 (5) 遊覧曆表 遊覧箇所略図 東山 加茂川

**【中央部】**(6) (233-285頁)

矢田地蔵・天性寺・本能寺・妙満寺・善導寺・高瀬川・高田坊・革堂・下御霊社・宗像神社・菅原院天満宮・護王神社・梨木神社・遣迎院・盧山寺・浄華院・本禅寺・相国寺・大聖寺・靈光院天満宮・白峰宮・晴明神社・瑞龍寺・名和長年公碑・堀川・辰橋・聚楽邸址・御所八幡宮・瑞泉寺・新京極・誓願寺・和泉式部塔・蜻蛉師・円福寺・安養寺・錦天満宮・歓喜光寺・金蓮寺・染殿地藏 (以上、上京)・八坂神社御旅所・大雲院・神宮教京都本部・浄教寺・御影堂・長講堂・太子堂白毫寺・市比売神社・宗仙寺・本派本願寺・大谷派本願寺・興正寺・本国寺・角屋・佐女牛井・藪内氏茶亭・夕顔塚・仏光寺・玉津島神社・因幡堂・五條天神社・住吉神社・円山応挙墓・菅大臣神社・紅梅殿神社・空也堂・頂法寺・尊攘堂 (以上、下京)

**(下巻)****【東南部 (上)】**(1-77頁)

日岡神明宮・仏光寺廟所・良恩寺・粟田神社・尊勝院・植髮堂・青蓮院・知恩院・八坂神社・一力亭・仲源寺・將軍塚・東大谷別院・七観音院・安井神社・建仁寺・有楽館・恵美須神社・六波羅密寺・念仏寺・八坂庚申堂・八坂之塔・翠紅館・高台寺・靈山招魂場・正法寺・清水寺・地主神社・清閑寺・鳥部山・後京極摂政藤原良経公碑・西大谷・若宮八幡宮・三島神社・佐藤継信兄弟塔・小松谷正林寺・妙法院・新日吉神社・智積院・豊国神社・大仏殿・耳塚・蓮華王院・養源院・新熊野神社・劍神社・今熊野観音・泉涌寺・雲龍院・夢の浮橋・一の橋・瀧尾神社・法性寺・東福寺・稲荷神社・石峰寺・宝塔寺・瑞光寺・十二帝陵・嘉祥寺・眞宗院・仁明天皇陵・藤森神社・桓武天皇陵・伏見城址・三夜荘・観月橋・月橋院・京橋・御香宮神社・西岸寺・金札神社・伏見町・欣浄寺・墨染寺

**【東南部 (下)】**(78-112頁)

日岡・花山元慶寺・大石稲荷・天智帝陵・安祥寺・毘沙門堂・護国寺・山科大谷派別院・山科本派別院・十禅寺・諸羽神社・四の宮川・法厳寺・音羽滝・音羽神社・岩屋神社・坂上田村麻呂公墓・大石良雄宅址・勸修寺・宮道神社・藤原高藤公墓・随心院・下醍醐寺・三宝院・理性院・上醍醐寺・清滝神社・醍醐帝陵・朱雀帝陵・金剛王院・長尾天神社・笠取山・日野・法界寺・石田神社・六地藏・八科嶺・仏国寺・木幡關址・正行寺・藤原氏歴世墓・許波多神社・宇治火薬庫・萬福寺・三室戸寺・蜻蛉石・兎道山稜・橋寺・彼方神社・朝日山・喜撰ヶ嶽・宇治神社・興聖寺・亀石



〔**東北部**〕(113-192 頁)

檀王法林寺・頂妙寺・要法寺・寂光寺・満足稲荷神社・聞名寺・南禅寺・満願寺・永観堂・若王子・光雲寺・大豊神社・靈鑑寺・安楽寺・法然院・銀閣寺・白河越・將軍地蔵・熊野神社・聖護院・岡崎神社・岡崎別院・善正寺・金戒光明寺・真如堂・東北院・迎称寺・吉田神社・卜部家齊場・宗忠神社・知恩寺・詩仙堂・石川丈山墓・金福寺・曼殊院・円光寺・音羽の滝・林丘寺・赤山禅院・山端・三宅八幡宮・御蔭社・八瀬・御所谷碑・小野毛人の墓・大原・小野山・惟喬親王旧址・魚山・呂川律川・清和井水・三千院・後鳥羽帝順徳帝御陵・證據の弥陀・往生極楽院・来迎寺・音無の瀧・寂光院・龍華越・江文神社・大雲寺・実相院・円通寺・本涌寺・妙泉寺・鴨御祖神社・本満寺・幸神社・阿弥陀寺・十念寺・上御霊神社・天寧寺・西園寺・上善寺・三時知恩寺・光照院・夢覚寺・妙顯寺・妙覚寺・本法寺・千家茶亭・報恩寺・宝鏡寺・妙蓮寺・瑞光院・大応寺・賀茂別雷神社・市原・鞍馬寺・貴船神社・峰定寺

〔**西北部**〕(193-294 頁)

般舟三昧院・歓喜寺・本隆寺・石像寺・大報恩寺・引接寺・七野神社・紫野・船岡・建勲神社・雲林院の址・大徳寺・今宮神社・薬師山・鐘打山・神光院・正伝寺・金峯寺・棧敷嶽・小野道風社・菩提瀑・光悦寺・鏡石・石蔭・紙屋川・蓮台寺・浄福寺・智恵光院・北野神社・観音寺・清和院本光寺・平野神社・金閣寺・衣笠山・大極殿旧址・慈眼寺・華開院・立本寺・大將軍社・真如寺・等持院・龍安寺・七陵・仁和寺・宇多天皇御陵・光孝天皇御陵・鳴滝・般若寺・蓮華峯寺・砂光寺印金堂・梅畑八幡宮・高雄榎尾及榎尾・神護寺・西明寺・高山寺・双岡・清原夏野公墓・法金剛院・妙心寺・神泉苑・木鳥神社・大酒神社・広隆寺・帷子の辻・車折神社・千代の古道・廣澤池・遍照寺・大澤池・大覚寺・直指庵・菖蒲谷・嵯峨帝陵・清涼寺・小楠公首塚・厭離庵・清滝・愛宕山・愛宕神社・月輪寺・水尾山寺・清和帝陵・嵯峨野・御亀山天皇御陵・往生院址・勾當内侍隠棲旧址・新田義貞首塚・小倉山・二尊院・常寂光寺・野々宮・亀山殿旧址・天龍寺・御嵯峨亀山二帝陵・鹿王院・曇華院・臨川寺・嵐山・法輪寺・月読宮・松尾神社・地蔵院・西芳寺・浄住寺・真如寺・梅の宮・長福寺・久遠寺・高山寺・壬生寺・更雀寺

〔**西南部**〕(295-336 頁)

源為義塚・六孫王神社・教王護国寺・西寺・羅城門旧址・吉祥院天満宮・淳和帝火化所・向日町・向神社・真経寺・長岡都址・願徳寺・長岡山陵・大原野神社・花の寺・弟国故都・淳和帝陵・金蔵寺・三鈴寺・善峰寺・十輪寺・在原業平母塔・乙訓神社・粟生光明寺・長法寺・寂照院・乙訓寺・長岡天満宮・楊谷寺・土御門帝陵・神足神社・勝龍寺城址・円明寺・葛原親王墓・小倉神社・天王山・酒解神社・観音寺・宝積寺・妙喜庵・離宮八幡宮・關戸祠・興杼神社・羽束神社・実相寺・恋塚・鳥羽離宮址・眞幡寸神社・竹田・不動院・安楽寿院・白河帝陵・鳥羽帝陵・近衛帝陵・金光寺



【南部】(337-373 頁)

宇治町・宇治川・宇治橋・平等院・橋姫祠・縣神社・巨椋神社・伊勢田神社・巨椋湖・久世神社・長池・玉津岡神社・玉水・井手玉川・有王山・光明山・高倉宮・蟹満寺・神童寺・泉橋寺・高麗寺旧蹟・木津川・木津町・一の坂念仏石・加勢山・瓶原・瓶原宮址・国分寺・相楽頓宮址・恭仁の都故趾・海住山寺・岡田離宮址・岡田鴨神社・浄瑠璃寺・笠置寺・宇治白川・宇治田原・天武天皇祠・田原天皇社・禪定寺・信西塚・猿丸大夫祠・金胎寺・大智寺・淀城址・八幡町・八幡山・男山八幡宮・小野頼風塚・橋本・正法寺・妙勝禪寺・筒城故都趾・祝園神社・土師・藤原百川公墓

【丹波丹後部】(374-381 頁)

金剛寺・穴太寺・常照寺・舞鶴・普甲山・宮津町・天橋山智恩寺・天橋立・真井原・成相寺

祭事 (382-406 頁)

【附録】連合府県記事

連合府県事由

奈良県・大阪府・兵庫県・岡山県・広島県・香川県・滋賀県・三重県・岐阜県・愛知県

資料：京都市参事会（代表内貴甚三郎）（1895）『京華要誌』京都市参事会

註：①京都府内および連合府県内における個別の名勝地は省略した。

②「下巻」は京都市内およびその近郊のものである。

『京華要誌』における京都の地域区分と主な遊覧箇所は以下の通りである。

① 「中央部」[「繁華の中心」(『京華要誌 (上)』：208) ]

皇居・離宮、および、近代建築部を除く、遊覧箇所（ここでは「名勝」として掲載）は、「中央部」としての繁華街から始まる。寺町三条北にある矢田地蔵を基点に、寺町通を北上。本能寺、革堂、高瀬川、下御霊神社、護王神社、盧山寺を経て、今出川に至ると、北西に折れ、相国寺、白峰神社方面に進み、晴明神社、戻橋等、堀川周辺から南下。途中、御所八幡宮（御池通堺町）、瑞泉寺（木屋町三条）を経て、新京極通を南下し本願寺を巡る。再び西に向かい、角屋へ。仏光寺、五条天神社を経て、頂法寺（六角堂）、尊攘堂（高倉通錦小路）へと戻る (図 2)。以上が『京華要誌』上巻に登場する京都「中央部」の名勝である。(同：

② 「東南部」(上・下) [「鴨川より東、蹴上街道より南にして其南は宇治川」(同：208) ]

「東南部」(上) は、日岡神明宮 (蹴上東北山中)、粟田神社、青蓮院など、粟田口周辺から始まり、知恩院、八坂神社、一力亭と祇園を経て東山を南下、伏見に至る。対して「東南部」(下) は、日岡 (山科街道) から花山元慶寺、毘沙門堂、護国寺、随心院、醍醐寺など山科村および醍醐村をめぐり、六地藏、萬福寺、三室戸寺、宇治神社など宇治村に出る。(『京華要誌 (下)』:1-112) (図 3)

③ 「東北部」 [「蹴上街道より北、鴨川より東、今出川通りより北、大宮通りの丹波街道以東をかぎり愛宕郡の全部」(『京華要誌 (上)』:208) ]

檀王法林寺 (三条通川端東) から東北方向へ進み、南禅寺、永観堂など東山を北上。銀閣寺に至ると金戒光明寺、真如堂と南下し、再び、吉田神社、詩仙堂、赤山禅院を経て北上。八瀬・大原方面を巡り、実相院、鴨御祖神社、賀茂別雷神社まで南下。再び、鞍馬・貴船へと北上し、花背村の峰定寺に至る。(『京華要誌 (下)』:113-192) (図 4)

④ 「西北部」 [「大宮通りを限り北は大宮通りの丹波街道より西、南は七条通り丹波街道より北」(『京華要誌 (上)』:208) ]

般舟三昧院 (今出川千本東) を北上し、大報恩寺、船岡、大徳寺など愛宕郡大宮村をさらに北上。正伝寺 (愛宕郡大宮村)、棧敷嶽 (葛野郡小野村)、光悦寺 (葛野郡鷹ヶ峰村) を経て南下。北野神社 (御前通一条)、本光寺 (本誓願寺通七本松西入) まで下り、金閣寺、衣笠山まで再び北上。再度、大將軍社まで南下し、龍安寺、仁和寺、鳴滝を経て、高雄・横尾・梶尾方面等西北に向かう。その後、嵯峨野、嵐山を通過して南下、松尾神社、西芳寺を経て、壬生寺、更雀寺 (四条進大宮西) の東方へ進む。(『京華要誌 (下)』:193-294) (図 5)

⑤「西南部」[「七条通りより南にて西は西北部の北を限り東は竹田街道を限り南は淀川を以て境とす」(『京華要誌(上)』:209)]

源為義塚(七条通千本)から南下、教王護国寺(九条四塚通)、吉祥院天満宮(紀伊郡吉祥村)を経て、向神社、長岡都址など向日町を廻り、大原野神社、花の寺など乙訓郡大原野村へ。善峯寺、十輪寺など小鹽村を経て、粟生光明寺、乙訓寺、長岡天満宮など乙訓村、淀川近くの天王山、観音寺など大山崎村に至り、鳥羽離宮址(紀伊郡鳥羽村)、竹田村の東方へ進む。(『京華要誌(下)』:295-336) (図6)

⑥「南部」[「南部は久世、綴喜、相楽三郡」(『京華要誌(上)』:209)]

宇治川、平等院、縣神社など久世郡宇治町を廻り、巨椋湖(久世郡小倉村)、久世神社(久世郡久津川村)、玉津岡神社、光明山など綴喜郡井手村を経て、相楽郡に至る。(『京華要誌(下)』:327-373) (図7)

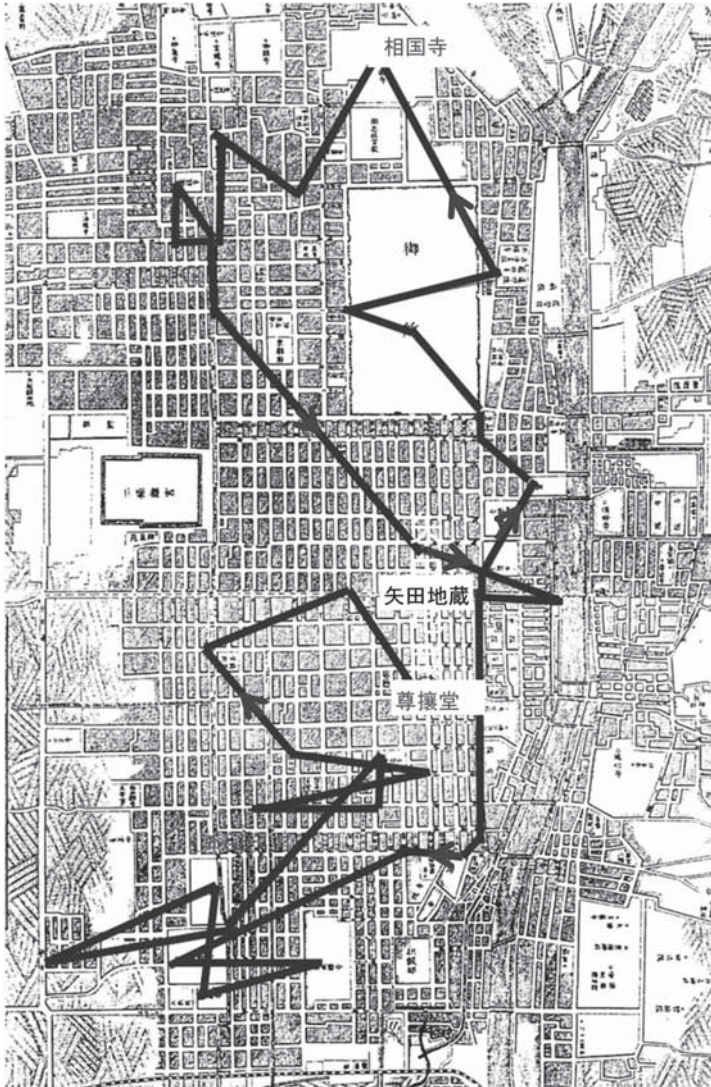


図2 『京華要誌』にみる京都の地域区分と巡覧コース「中央部」

資料出所：『京華要誌（上）』（1895）の折込地図「京都市名所図」（39.5cmx51cm）をもとに筆者作成。



図3 「東南部」

図3～7 資料出所：『京華要誌（上）』（1895）の折込地図「山城国全図」（39.5cmx51cm）をもとに筆者作成。



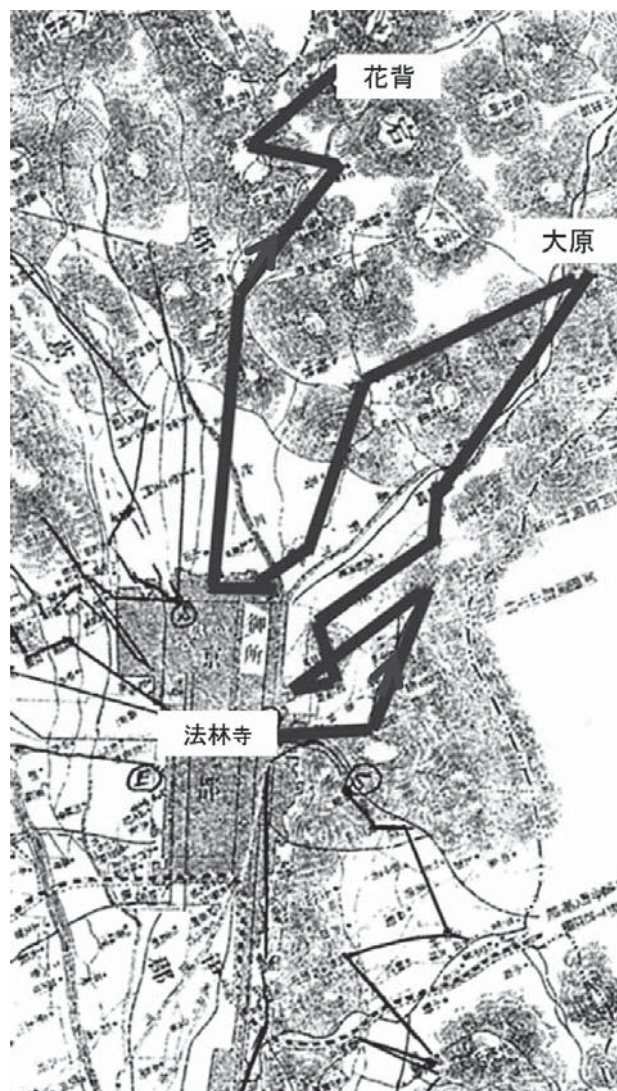


图4 「東北部」

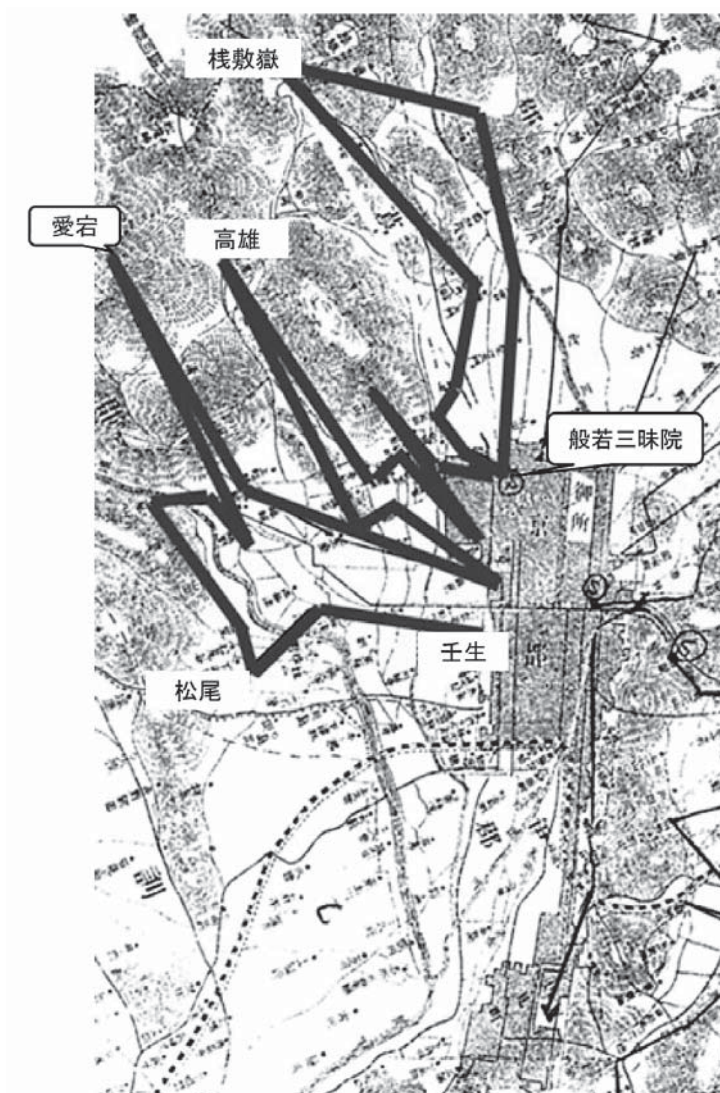


図5 「西北部」



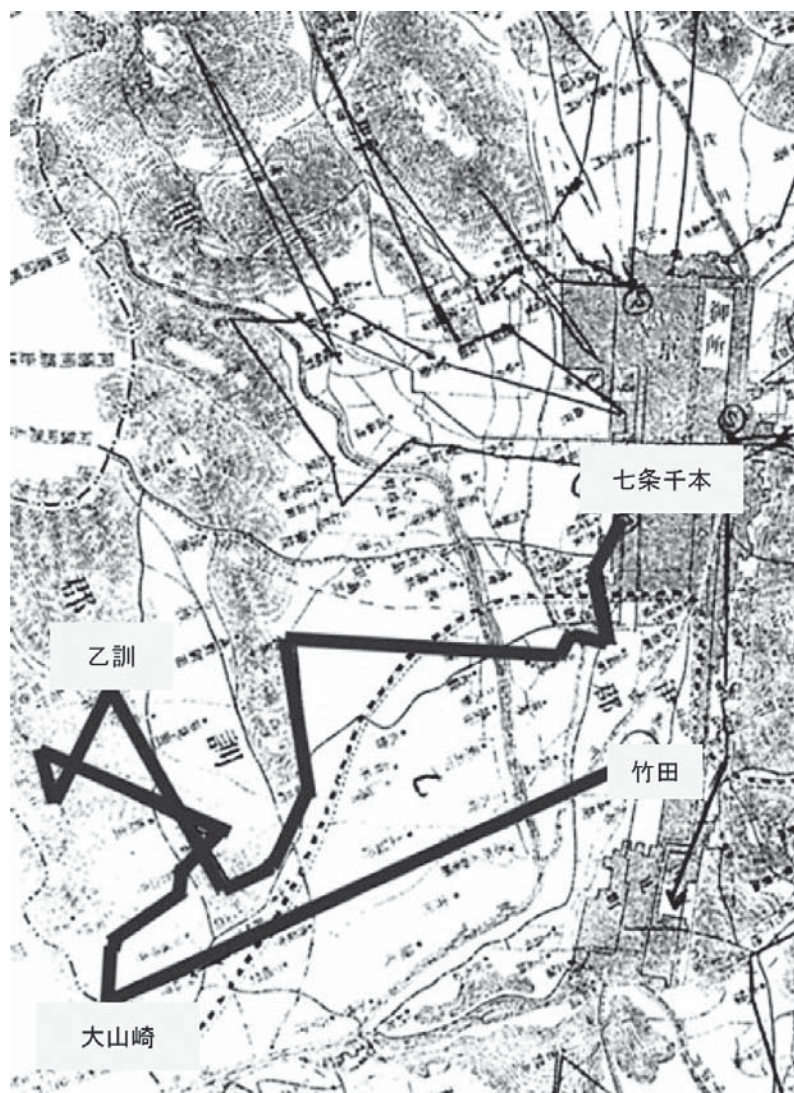


图6 「西南部」



図7 「南部」

## (2) 小冊子『京都紀念祭及博覽会一斑』

『京華要誌』のほか、明治28年に市が発行に関与したものに、『京都紀念祭及博覽会一斑（以下、「小冊子」）』、および、英文ガイドブック“*The Official Guide-Book to Kyoto and the Allied Prefectures*（以下、「英文ガイドブック」）”があった。小冊子の著作兼発行者は西村義民となっているが、『紀事（下）』には次のようにある。

京華要誌の卷冊浩□に及び広布に不便なる見込あるより二十七年二月七日更に和文小冊子を製することとし其編纂を中川重□に託し紀念祭計画の大□及び博覽会其他著名の勝景等記事及び石版画を挿入し凡十ページの小冊と為し名を京都紀念祭及博覽会一斑と題し二月十八日原稿成功せり（同：102丁）

このように、『紀事（下）』によれば、『京華要誌』は計画当初からすでに500頁に及ぶ規模のものが計画されていたため、「広布に不便」という理由から、代わりに10頁程度の『京都紀念祭及博覽会一斑』と題する小冊子を作成したことがわかる。編纂者として中川の名は挙がっているものの、西村義民には全く触れていない。

しかし、西村による「小冊子」はまさに10頁からなる13cmx19cmの小冊子で、紀念殿、博覽会場、円山公園、嵐山等の版画が挿入されている。さらに、西村自身、編纂当時、平安遷都紀念祭委員で、しかも、「式典部及編纂部」に属していた（『紀事（上）』：11、17丁）。このことから、「小冊子」は、京都市刊行とは明記されていないものの、『紀事（下）』がいうところの京都市の発行物に該当すると考えてよいだろう。

表2 小冊子『京都紀念祭及博覧会一斑』の概要

<p>○紀念殿紀念祭及び協賛会の事 (1-3 頁)</p> <p>○第四回内国博覧会の事 (3-4 頁)</p> <p>○疏水運河及び水力電気の事 (4-5 頁)</p> <p>○御所離宮社寺公園等名所風致 (5-8 頁)</p> <p>御所 (含仙洞御所) → 離宮 (二条・修学院・桂) → 京都博覧会場</p> <p>(名勝)「東山」叡山→八瀬大原→銀閣寺→吉田神社→黒谷真如堂→詩仙堂→芭蕉庵          →永観堂→南禅寺→インクライン→青蓮院→知恩院→円山祇園→將軍塚→東大谷→          高台寺・靈山→八坂→清水→五条坂→大仏方廣寺→耳塚→三十三間堂→豊国神社→          帝國京都博物館→泉涌寺→東福寺→伏水稲荷</p> <p>「西山」愛宕山→高雄・榎尾・横尾→嵐山→天龍寺・大覚寺・釈迦堂→小督塚・小倉          山→太秦広隆寺→御室・妙心寺→松尾神社・吉峰寺・粟生光妙寺・山崎・天王山・          長岡天神・梅津神社</p> <p>「洛北」鞍馬山・毘沙門天・貴船神社→大徳寺→今宮→船岡山→建勲神社→北野→平          野の社→金閣寺・等持院・龍見寺</p> <p>「城南」伏水・桓武天皇陵→桃山→巨椋池→淀城→八幡神社→黄檗寺→平等院・興聖寺</p> <p>「市内」東西本願寺→東寺・六孫王・六角堂→壬生寺→神泉苑→大極殿旧地</p> <p>○汽車人力車及び宿屋等の事 (8-9 頁)</p> <p>○京都主要物産の事 (9-10 頁)</p> <p>○聯合府県の事 (10 頁)</p>
---

資料：西村義民 (1895) 『京都紀念祭及博覧会一斑』

表2に記した通り、全10頁の小冊子は、「紀念殿紀念祭及び協賛会の事」(1-3頁)、「第四回内国博覧会の事」(3-4頁)、「疏水運河及び水力電気の事」(4-5頁)、「聯合府県の事」(10頁)、というように、大部分が紀念祭および博覧会関係の情報で占められている。そのほか、「汽車人力車及び宿屋等の事」(8-9頁)、「京都主要物産の事」(9-10頁)といった旅の情報もあり、「御所離宮社寺公園等名所風致」に関しては、わずか4頁(5-8頁)である。

従って、名勝地の説明はあまりなく、「(円山公園の後) 將軍塚其東に在り東大谷其南に在り高台寺靈山亦近し」というように方角を示しただけのものや、

「松尾神社吉峯寺粟生光妙寺山崎天王山長岡天神梅津神社等皆洛西の名勝旧跡とす」と、単に名称を列挙するだけのものが非常に多く、名所案内記としてはほとんど役に立たなかったと思われる。

小冊子は、『京華要誌』と同様、御所・離宮および博覧会場・疏水運河などを、他の地域ごとにまとめた遊覧箇所とは別に記している。しかし、小冊子中の「帝國京都博物館」は、「東山」の遊覧箇所の一つとして位置づけられた。

また、小冊子と『京華要誌』では、各地域の呼称が異なり（例えば「中央部」を「市内」、「東南部」・「東北部」を「東山」など）、当然ながら、各々が包含する範囲も異なる。同じ遊覧箇所を示す場合にも、「金福寺」「大仏殿」「蓮華王院」「教王護国寺」（以上、『京華要誌』）に対して、「芭蕉庵」「大仏方廣寺」「三十三間堂」「東寺」（以上、小冊子）と記され、呼称が統一されていない。

さらに、遊覧順路を比較すると、『京華要誌』では、「中央部」→「東南部」→「東北部」→「西北部」→「西南部」→「南部」というように、京都の中心から東→北→西→南の順に反時計回りで巡っているのに対し、小冊子では、「東山」→「西山」→「洛北」→「城南」→「市内」、すなわち、東→西→北→南→京都の中心という順番で、『京華要誌』とは全く異なるルートである。

### (3) 英文ガイドブック

次に京都市参事会発行の英文ガイドブックを見てみたい。

英文ガイドブックの編纂校閲は市原盛宏に委託され(明治27年1月23日)、『紀事(上)』:101丁)、費用は京都市参事会から市原に交付された(同)。「記事は大略和文案内記(『京華要誌』)に同じきも□外国人の意向需用を考へ増加補成」された(同:102丁)。

『紀事(上)』(100-101丁)には、英文ガイドブックの「編纂は日本文を先にし其成稿に因り欧文にて翻訳」と記されているが、前述のように『京華要誌』自体の成稿が明治27年12月であったことから、日本文の成稿を待たず、日英文編纂事業が同時に行われていたと考えるべきであろう。



表3 英文ガイドブックの構成

- Preliminary Information (基本情報) (1-35 頁)
  - Geographical Sketch (京都の全体像) (36-42 頁)
  - History (京都創立沿革) (43-52 頁)
  - The Fourth National Industrial Exhibition (第四回内国勸業博覧会) (53-55 頁)
  - The Celebration of the Eleven Hundredth Anniversary of the Founding of Kyoto (平安遷都千百年記念祭) (56-62 頁)
  - The Lake Biwa Canal (琵琶湖疏水) (63-66 頁)
  - Disposition of Time (旅程) (67-68 頁)
  - The Shinto Religion (神道) (69-71 頁)
  - Japanese Buddhism (日本の仏教) (72-74 頁)
  - The Imperial Park and Palace (御苑皇宮) (75-82 頁)
  - Temples and Noted Places (名勝) (83 - 194 頁)
  - Ama-no-Hashidate (天橋立) (195-196 頁)
  - The Principal Manufactures of Kyoto (京都の主要物産) (197-208 頁)
  - Schools and Hospitals (学校および病院) (209-216 頁)
  - Societies (217 頁)
  - The Allied Prefectures (連合府県について) (1-68 頁)
- The Cooperation of Other Prefectures with Kyoto in The Celebration of its Anniversary.
- Osaka-Fu. Nara Prefecture. Miye Prefecture Aichi Prefecture Gifu Prefecture  
Shiga Prefecture Hyogo Prefecture Okayama Prefecture Hiroshima  
Prefecture Hiroshima Prefecture Kagawa Prefecture
- Vocabulary and Short Phrases (単語と言い回し) (69-96 頁)

The City Council of Kyoto (1895) “*The Official Guide-Book to Kyoto and the Allied Prefectures*”,  
Meishinsha.

英文ガイドブックと日本語の2冊との大きな違いは、京都の旅情報としての「Preliminary Information (基本情報)」があること、「The Shinto Religion (神道)」および「Japanese Buddhism (日本の仏教)」といった宗教の説明、「Disposition of Time」と称した推奨旅程、そして、最後に簡単な「Vocabulary and Short Phrases」(日本語の紹介)が記されている点である。

基本情報や宗教、日本語の説明は、外国人向け発行書としての特徴といえよう。

「Disposition of Time」は、言語に関わらずあった方がよい項目だが、日本語の案内書には見られず、英文ガイドブックにのみ工夫を凝らしてある箇所であった。『京華要誌』や小冊子に掲載された遊覧順路は、地域ごとにまとめてはあるものの、現実には即していない。小冊子においては、単に遊覧箇所を列挙しただけである。

しかし、英文ガイドブックにおいては、「Disposition of Time」として、わざわざ推奨ルートを示している。これは、2日間から4日間しか滞在できない人向けのもの(表4)、10日間滞在できる人向けのもの(表5)とを、あえて区別している。

10日間の推奨ルートを見ると(表5)、初日は、Imperial Palace(御所)をスタートし、Shimo-gamo(下鴨)、Kurodani(黒谷)、Ginkakuji(銀閣寺)を経てインクラインへ。2日目は、Chion-in(知恩院)から東山を南下して、Toji(東寺)へ(図8)。3日目は、Nijo Palaceからやや西へ。4日目は、Katsura Rikyuから北上するコース。5日目北西部、6日目北東部、8日目は伏見と宇治、9日目は大津方面へ行き、琵琶湖疏水経由で戻るコース。10日目は南西部である(図9)。一日ごとに巡る地域が明確で、無駄な移動を省き、効率的に組まれている。しかも、特に遊覧者が関心を持ちそうなところ(特にお勧めの場所)を「\*」で示すなど、遊覧者が旅程を組みやすいように構成されている。

2日間から4日間のルート(表4)については、単純に10日間のもの(表5)から4日目までを抜粋したのではなく、重要だと思われる場所を選別し、新



たなルートが組まれているのである。

ここでは、

‘Engaging Jinrikisha early in the morning (朝早く人力車を雇い) …’,  
 ‘Those not caring for so much exercise can go on to Yase where kago, or  
 bamboo chairs, may be hired for the ascent (あまり体力を消耗したくない人  
 は、八瀬に行き、籠、すなわち、竹でできた椅子を雇い、登ることもできる)’ ,  
 ‘If not too late, return by way of the Canal; otherwise, by jinrikisha or rail  
 road. (あまり遅くなければ、疏水経由で戻る、もしくは、人力車か鉄道を利用  
 する)’ [以上、英文ガイドブック：68 (括弧内引用者訳、以下同じ) ]

というように、推奨ルートの中に交通手段への助言も見られる。

こういった遊覧者の利便に対応した合理的な情報提供は、日本語の2冊には  
 全く見られなかった点である。

表4 英文ガイドブックにみる推奨見学ルート (2-4日間)

1 <sup>st</sup> Day	Nishi Hongwanji, Higashi Hongwanji, Sanjusangendo, Daibutsu, Myoho-in, Kiyomizu-dera. (Jinrikisha)
2 <sup>nd</sup> Day	Chion-in, Kurodani, Ginkakuji, Imperial Palace, Kitano, Kinkakuji and Nijo Palace.
3 <sup>rd</sup> Day	Rapids and Arashiyama
4 <sup>th</sup> Day	Shugakuin, Yase, Sakamoto, Otsu, Miidera, Ishiyama. (Jinrikisha / Kago / Canal)

The City Council of Kyoto (1895) “*The Official Guide-Book to Kyoto and the Allied Prefectures*”,  
 Meishinsha, 68.

表5 英文ガイドブックにみる推奨見学ルート (10日間)

1 <sup>st</sup> Day	*Imperial Palace, Doshisha, Shokokuji, *Shimo-gamo, Third Koto Gakko, Yoshida Jinsha, Shinnyodo, *Kurodai (Komyoji) , *Ginkakuji, Shishigatani , Niakoji, Eikwando, Nanzenji, the Canal "Incline"
2 <sup>nd</sup> Day	*Chion-in, *Maruyama Park, Yasaka-Jinsha, *Higashi Otani, Kenninji, Kodaiji, Ryozen, *Kiyomizu-dera, *Nishi-Otani, *Daibutsu, Myohoin, Toyokuni Jinsha, *Sanjusangendo, *Higashi Hongwanji, *Nishi Hongwanji, Toji.
3 <sup>rd</sup> Day	*Nijo Palace, *Kitano Tenjin, Hirano Jinsha, Daitokuji, Takeisa Jinsha, *Kinkakuji, Toji-in, Omuro Ninnaji, Myoshinji.
4 <sup>th</sup> Day	*Katsura Rikyu, *Hozugawa Rapids, *Arashiyama, Tenriuji, Koriuji.
5 <sup>th</sup> Day	*Toganoo, Makinoo, *Takao, Hirosawa-no-ike, Seiryoji, Daikakuji; or Atagoyama and some of these places on the way.
6 <sup>th</sup> Day	Kami-gamo, Kurama-yama, Kibune-Jinsha.
7 <sup>th</sup> Day	*Shugakuin Rikyu and *Mt. Hiei.
8 <sup>th</sup> Day	*Uji, including *Byodoin, *Hoo-do, and Mampukuji; Fushimi, *Inari-jinsha, and Tofukuji.
9 <sup>th</sup> Day	*Miidera, *Karasaki Pine-tree, Enryakuji, *Ishiyama, returning by *Biwa Canal.
10 <sup>th</sup> Day	*Otokoyama Hachiman, Tennozan, Nagaoka Tenjin.
	Shinkyogoku and other pecces of interest nearby may be seen at any convenient time.

The City Council of Kyoto (1895) "*The Official Guide-Book to Kyoto and the Allied Prefectures*", Meishinsha, 68-69.

註：遊覧者が特に強い関心を持つであろう箇所は\*で記されている。(The places which are of most interest to visitors are starred.)

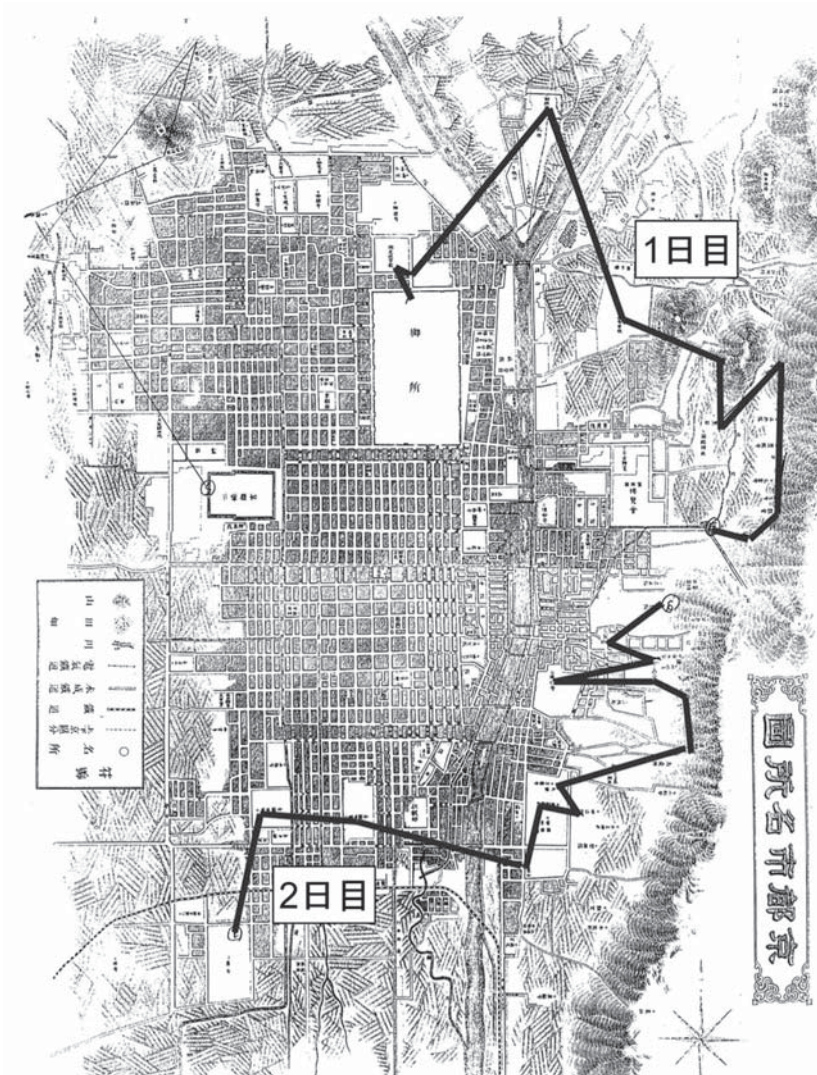


図8 英文ガイドブックによる推奨ルート（10日間）①

資料：『京華要誌（上）』（1895）の折込地図「京都市名所図」（前掲）をもとに筆者作成。

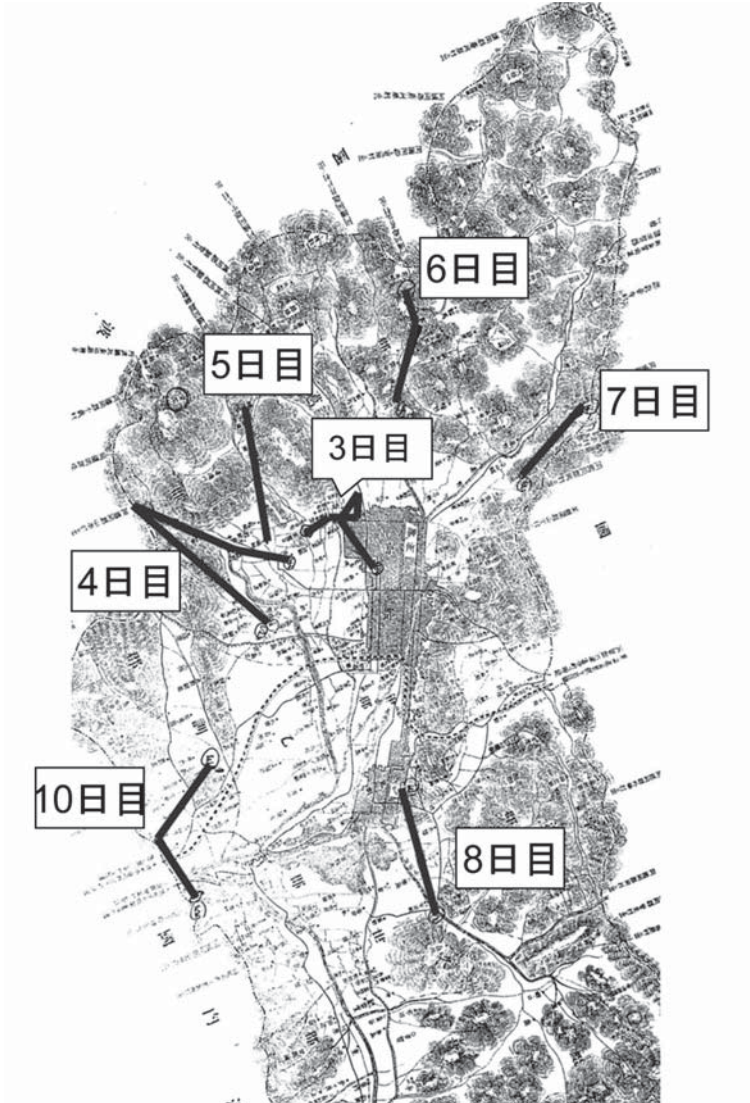


図9 英文ガイドブックによる推奨ルート（10日間）②

註：9日目は大津方面（三井寺～石山寺）のため除外している。

資料：『京華要誌（上）』（1895）の折込地図「山城国全図」（前掲）をもとに筆者作成。

表6 英文ガイドブックに掲載された名勝

○ Temples and Noted Places (名勝) (83 - 194 頁)

The Goryo Temples, Nashinoki Temple, Goo Temple, Shokokuji, Shimo-gamo (Lower Kamo), Ginkakuji, Higashi-yama, Shishigatani, Dangogatani, Nioigatake, The Romon Waterfall, Niakoji Eikwando, Nanzenji, The Tomb of Prince Takanaga, Okazaki, The House of the Poet Basho, Kurodani, Shinnyodo, Yoshida Temple, To-Sanjo, The Residence of Yoshida Kenko, Kumano, Kumano Temple, The Cemetery of the Onodera Family, Yoboji, Chion-in, Uegamido, Yoshimizu Park, Keage, Ubagu Futokoro, Awataguchi, Shirakawa Bridge, Yasaka-no-Yashiro, Public Park at Maruyama, Kodaiji, Ryozen, the Yasaka Pagoda, Kenninji, Yasui Temple, Rokuhara Mitsuji, Chinkoji, Kiyomizu-dera, Nishi Otani, Daibutsu Hokoji, Toyokuni Jinsha, Myoho-in, Sanjusangendo, Chishaku-in, Higashi Hongwanji, Hongwanji, Bukkoji, Honkokuji, Toji, Nijo Rikyu or Palace,

Daitokuji, Imamiya Temple, Daihoonji, Kitano Temmangu or Tenjin, Hirano Temple, Kinkakuji, Toji-in, Ryuanji, Ninnaji, Myoshinji, Katsura-no-Rikyu, Hozukawa, Arashi-yama, Horinji, Umenomiya Jinsha, Matsuno-o Jinsha, Saihoji, Konoshima Jinsha, Koryuji, Seiryuji, Daikakuji,

Nison-in, Tenryuji, Atago-yama, Toga-no-o, Maki-no-o, Taka-o, Lake Hirosawa, Lake Osawa, Kami-Gamo, Matsugasaki, Mizoro-no-ike, Yashio Hill, The Tombs of Ono-no Komachi and Fuka kusa Shosho, Fune-no Okuribi, Daihizan, The Takiya Waterfalls, Mt. Kurama, Bodai Waterfall, Kibune Jinsha, Yamabana, Yase, Kitashirakawa, Bashoan at Kimpukuji, Shisendo, Manjuin, Shugakuin Rikyu, Hiei-zan, Sanzen-in, Senyuji, Tofukuji, Inari Temple, Fujinomori Temple, Fushimi, Momoyama, The Tumulus of the Emperor Kwammu, Goko-no-miya, Ogura Lake, Uji, Byodo-in, Agata Temple, Koshoji, Mamupukuji, Daigoji, Sampo-in, The Tomb of Tamura Shogun, Kwanjuji, Yamashina, Oharano Jinsha, Hanano-tera, Temman Temple of Nagaoka, Komyoji, Yanagidani Kannon, Hachiman Temple of Otoko-yama, Yodo, Love Mound (or Koidzuka), Rokkakudo, Myomanji, Honnoji, Shinkyogoku, Seigwanji, Takoyakushi, Sakarengi, Nishiki-no-Tenjin, Kwangikoji, Konrenji



次に、英文ガイドブックにおける「Temples and Noted Places」に記された名勝をみていきたい（表6参照）。

『京華要誌』および小冊子と同様、英文ガイドブックにも、御所および博覧会場・疏水運河は他の名勝地とは別に記されている。しかし、「離宮」（二条離宮および修学院離宮）については、特別な扱いがない。また、英文ガイドブックには、『京華要誌』において、わざわざ名勝と切り離して記された「帝國京都博物館」は、「Temples and Noted Places」にも項目が設けられていなかった。さらに、英文ガイドブックは、日本文ガイドブックにみられたような「中央部」（『京華要誌』）や「市内」（小冊子）といった地域ごとのまとまりもない。

The Goryo Temples（両御霊神社）、Nashinoki Temple（梨木神社）といった御所近辺をスタートし、Shimo-gamo（下鴨）へと、やや北上してから、Higashi-yama（東山）を南下。しかし、Eikwando（永観堂）、Nanzenji（南禅寺）と下がってから、Yoshida Temple（吉田神社）へと再び北上。Chion-in（知恩院）まで下がるが、Yoshimizu Park（吉水園）、Keage（蹴上）へとやや北上する。再び南下し、Shirakawa Bridge（白川橋）、Public Park at Maruyama（円山公園）等祇園から、Chinkoji（珍皇寺）、Kiyomizu-dera（清水寺）、Daibutsu Hokoji（大仏方廣寺）、Sanjusangendo（三十三間堂）等を東山を下がってから、西に折れ、Hongwanji（本願寺）に向かう。Toji（東寺）まで下がると、一気にNijo Rikyu（二条離宮）まで北上。Daitokuji（大徳寺）、Kitano Temmangu（北野天満宮）、Kinkakuji（金閣寺）などを経て、Myoshinji（妙心寺）まで西に進むと、次は一度にKatsura-no-Rikyu（桂離宮）まで西南に進む。再びHozukawa（保津川）まで北上し、Arashiyama（嵐山）、Horinji（法輪寺）、Matsuno-o Jinsha（松尾神社）、Saihoji（西芳寺）と少しずつ南下するが、再度、Konoshima Jinsha（木島神社）、Koryuji（広隆寺）等、太秦まで北上。さらに、Seiryoji（清凉寺）、Nishon-in（二尊院）、Tenryuji（天龍寺）など嵯峨を南下してから、Atago-yama（愛宕山）、Taka-o（高雄）へと北上。Lake Hirosawa（広沢池）、Lake Osawa（大沢池）から、Kami-gamo（上

賀茂)へと飛び、Mt.Kurama(鞍馬山)、Yase(八瀬)から南下。Bashoan(芭蕉庵)まで下がってから、ふたたびShugakuin Rikyu(修学院離宮)に北上、Hiei-zan(比叡山)、Sanzen-in(三千院)をめぐる、Senyuji(泉涌寺)まで一気に南下。Inari Temple(稲荷神社)、Byodo-in(平等院)、Kwanjuji(勧修寺)など、伏見、宇治、山科を廻ってから、Temman Temple of Nagaoka(長岡天満宮)、Hachiman Temple of Otoko-yama(男山八幡宮)など西南へ飛び、Love Mound(恋塚)を経てから、Rokkakudo(六角堂)、Shinkyogoku(新京極)などの市内中心部に至る。

以上が、英文ガイドブックの「Temples and Noted Places」における掲載順である。明確な地域区分がなされていないため、一見すると移動に無駄な時間を要するように思われるが、10日間の旅程(表5)と照合すると、登場順番はほぼ同じである。東寺と二條離宮、妙心寺と桂離宮、三千院から泉涌寺のように、突如離れた遊覧箇所が登場するが、推奨旅程をみると、その理由が明らかである。そもそも編者は、日を改めて遊覧することを考慮していたのである。

また、本書の「Temples and Noted Places」においては、The Goryo Temples、Yoshida Temple、Hirano Temple など、多くの神社を「Temple」と訳している。中にはToyokuni Jinsha というように、「Jinsha(神社)」を用いているものもあるが、ほとんどが「Temple」なのである。それに対し、仏教寺院は、Ginkakuji、Nanzenji、Kiyomizu-dera、Hana-no-tera のように、「ji(寺)」や「dera/tera」とある。さらに、「The Shinto Religion」の説明の中には次のようにある。

‘・・・the two systems were so intermingled that Shinto deities were worshiped in Buddhist shrines; while priests of the foreign religion took charge of Shinto temples. [神道と仏教は互に混合していたので(神仏混淆)、神道の神様は Buddhist shrines で信仰され、同時に、外国の宗教(ここでは仏教を指している)の僧が Shinto temples の管理をしていた] (英文ガイドブック:69)



ここでも、神社 = Temple、寺院 = Shrine として扱われていたことが読み取れる。

その一方で、表4、表5の推奨旅程の中では、Yoshida Jinsha、Hirano Jinsha のように、表6中に「Temple」と示していた箇所が「Jinsha」となっており、神社を「Temple」としているものは皆無である。

従って、推奨ルートを考えて者と、名勝の説明を記した者が同一人物ではなかった可能性があり、成稿時に両者の刷り合わせがなされていなかったことが考えられる。

以上、明治28年(1895)に京都市が発行した名所案内3冊をみてきた。小冊子、英文ガイドブックの発行にあたり、本来ならば基となるべき『京華要誌』に沿った同一内容のものを、それぞれの特徴に合わせて編纂される予定であった。しかしながら、結局は、冊子全体の構成、すなわち、京都の全体像、博覧会関係の情報、琵琶湖疏水、御所、名勝、重要物産、連合府県等、大凡の大項目は揃っていたものの、名勝地に関しては、各々独自に編纂されて、全く統一されていない。これは、『京華要誌』編纂が決定してから短期間のうちに小冊子および英文ガイドブックの作成が決まり、基となる『京華要誌』の成稿を待っては、発行が間に合わないという状況下で事業が進行された結果だと考えられる。

また、日本語による2冊の名所案内が名勝地の説明(『京華要誌』)、および、名勝箇所を列挙しただけ(小冊子)であるのに対し、英文ガイドブックは、宗教の説明や日本語のフレーズなど、外国人に役立つものとして作成されているだけでなく、推奨ルートを名勝説明とは別に設けるなど、遊覧者の利便性を考慮して作成されたものであった。しかしながら、「Temple」、「Jinsha」といった英語表記の齟齬が各所に見られるなど、名所案内記としては未だ不完全であったといえよう。

## おわりに

以上、本稿では、明治28年に京都市参事会によって発行された名所案内記の概要と巡覧コースをたどることで、その当時の京都市が発信しようとしていた情報、および、京都の地域区分をみてきた。

明治28年の第四回内国博および記念祭の同時開催は、市政施行後の京都が迎えた最大のイベントであり、わずか一年の間に40以上もの名所案内記が発行された。

それまでの京都の名所案内記は、民間業者あるいは個人名義で発行されていたが、28年には、京都市参事会によって一冊の名所案内記が発行された。

市編纂による本格的な名所案内記は『京華要誌』が初めてだったと思われるが、これら3冊は、各々独自に編纂されており、大まかな項目は揃っているものの、名勝地に関する情報は三者の統一がなされていない。日本文の2冊、『京華要誌』と小冊子『京都記念祭及博覧会一斑』は、名勝地を地域ごとに分けて記載したが、各地域の呼称が異なり（「中央部」を「市内」、「東南部」・「東北部」を「東山」とするなど）、各々が包含する範囲も異なっている。さらに、遊覧順路も全く異なっていることから、この時点では、遊覧パターンがまだ明確になっていなかったと思われる。

また、小冊子については、京都市側は、市の発行物としているのにもかかわらず、西村義民個人名での編集発行と記されていた。このことは、当時の京都市参事会の構成にもみられるように、地元の名望家が京都市行政の重要な任務を担う明治初期からの在り方が存続していたことの表われと読み取れる。

日本語の2冊と比較して、英文ガイドブックはより現実的に作成された。これは、ガイドブック編纂が決定してからの期間が短かったために、三者の事実上の編纂者の意向が強く反映した結果だと思われる。今後の研究課題として、ガイドブックの遊覧順路と地域区分について交通網が整備されていった大正、昭和期の名所案内記と比較することで、その変化をみていきたい。

## 【注記】

- 1 高木（2008）は、この両イベントが、京都における桜の名所の転換期になったこと、京都の社寺が拝観料を徴収するなど観光化したことを指摘している。
- 2 高久（1995）、高木（2005）、小林（2006）、笠原（2004）ほか多数、近代京都史研究の立場から論じている。
- 3 樋口（1982）、大宮他（1995）、里居他（2003）、羽生（2005）など。
- 4 菅井（2004）は、17世紀末までの名所記は大本複数冊からなり、「机上で仮想の巡覧を楽しむ読物」であったのに対し、18世紀になると実際の巡覧に携行可能な小型名所記が登場したこと、さらに、編者の出身地、執筆当時の所在などから、小本であっても形式的な領域区分や順路設定がなされていたことを指摘した。
- 5 槇村正直「第二内国勸業博覧会御開設場所之儀ニ付上申」
- 6 鉄道敷設、記念祭・内国博は直接関係ないが、京都実業協会が「三大問題」として一体にした（小林2006a）。
- 7 このことは、明治21年（1888）4月25日に公布された法律第一号に付属する「市町村制理由」にもみることができる（原田1997：79）。
- 8 1892年12月、衆議院において、西村捨三が京都開催の条件として京都市が会場敷地を無償提供することを明言しているが、そのことは京都府会や市会では公式に議論されていない（小林2006b）。
- 9 國（2005）は、日清戦争と市場価値の低さから博覧会の売れ残り品が大量に発生したこと、そして、入場者数が会期終盤には停滞していたことから、第四回内国博を成功とはみなしていない。
- 10 明治25年11月には、東京で平安奠都紀念協賛会が設立され、京都市による記念事業に協力することを目的に、寄付金（約30万円）を集めた。協賛会の会長は、近衛篤磨、副会長は佐野常民であった。皇室からも5千円の下賜金があった（『京都の歴史8』：136）。
- 11 もともとは、4月末から5月初めに行われる予定だったが、明治天皇の体

調不良により、秋に延期となった。

### 【参考文献】

- 秋元せき（2001）「明治地方自治制形成期における大都市参事会制の位置—京都市の事例を中心に—」『日本史研究』472号。
- 井ヶ田・原田編（1993）『京都府の百年』山川出版社。
- 大宮・下村・熊谷（1995）「名所図会・百景にみる近代以降の東京における『景』の変遷に関する研究」『ランドスケープ研究』日本造園学会誌。
- 笠原一人（2004）「歴史・観光・博覧会第四回内国勸業博覧会と平安遷都千百年記念祭の都市空間」『ten plus one』。
- 京都市（1975）『京都の歴史8』學藝書林。
- 京都市参事会（1895）『京華要誌』京都市参事会（代表内貴甚三郎）。
- （1896）『平安遷都紀念祭紀事（上）』京都市参事会（京都府立総合資料館蔵）。
- （1896）『平安遷都紀念祭紀事（下）』京都市参事会（京都府立総合資料館蔵）。
- 京都出版史編纂委員会編（1991）『京都出版史（明治元年—昭和二十年）』日本書籍出版協会京都支部。
- 京都府商工経済会（1944）『京都商工会議所史』京都府商工経済会（京都大学附属図書館蔵）。
- 國雄行（2005）「第四回内国勸業博覧会」『博覧会の時代』岩田書院。
- 小路田泰直（1993）「帝国の都市と『自治』」成田隆一編『都市と民衆』吉川弘文館。
- 児島定七（1890）『京都策』吉田博声堂（国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」）。
- 小林丈広（2005）「『平安通志』の編纂と湯本文彦」明治維新史学会編『明治維新と歴史意識』吉川弘文館。
- （2006a）「都市祭典と政治—都市間競争時代の歴史意識—」『日本史研究』523号。

- (2006b)「平安遷都千百年記念祭をめぐって」(京都大学人文科学研究所内「近代京都研究会」発表資料)。
- 里居・羽生・十代田・津々見 (2003)「明治中期に刊行された外国人向け英文ガイドブックの記述内容の特徴 (平成 15 年度日本造園学会全国大会研究発表論文集 21)」『ランドスケープ研究』日本造園学会。
- 菅井聡子 (2004)「近世京都の名所案内記の順路設定にみる『洛中』『洛外』認識」『日本建築学会計画系論文集』第 579 号。
- 高木博志 (2005)「記念祭の時代」佐々木剋編『明治維新期の政治文化』思文閣出版。
- 高久嶺之介 (1995)『地方化』する京都』日本史研究会・京都民科歴史部会編『京都千二百年の素顔』校倉書房。
- 中村栄助 (1938)『九拾年』中村エン。
- 西村義民 (1895)『京都記念祭及博覧会一斑』西村義民。
- 羽生冬佳 (2005)「明治以降戦前までの東京の名所の成立・変遷に関する研究」『ランドスケープ研究』日本造園学会。
- 原田敬一 (1997)『日本近代都市史研究』思文閣出版。
- 樋口忠彦 (1982)「明治期東京の名所の変遷過程について一名所絵を対象にして」『都市計画別冊』(17) 日本都市計画学会。
- 平安神宮百年史編纂委員会 (1997)『平安神宮百年史 (本文編)』
- 丸山宏 [1986] (1996)「明治初期の京都博覧会」吉田光那編『万国博覧会の研究』思文閣出版。
- 森谷尅久編 (1994)『図説京都府の歴史』河出書房新社
- 若松雅太郎 (1896)『平安遷都千百年記念祭協賛誌 (玄武編)』
- The City Council of Kyoto (1895) *“The Official Guide-Book to Kyoto and the Allied Prefectures”* Meishinsha